

語り継ぐ

戦時中の日々

終戦から58年が経過しました。悪夢にも似た戦争の惨禍を、直接肌で知らない世代が占める今日。物があふれ、不自由のない毎日の平穏な生活に慣れた私たちは、過去の悲惨な戦争の傷跡を忘れつつあります。困難を乗り越え、耐え忍び、つらい厳しい思いをして生きぬいてきた方々のなまなましい体験を風化させず、次の世代に語り継ぐことは今だからこそ必要なことだと思います。

市内在住の小島久治さん(山手1丁目)と有賀正吉さん(湊5丁目)に語っていただきました。

比島沖海戦 (二回の生死)

私は終戦の一年前に海戦で巡洋艦と駆逐艦にそれぞれ乗り組んで、交戦し両艦とも沈没し九死に一生を得た。

一つの戦争でもその武力行使の中心は生死をかけた兵員であることを忘れてはならない。

昭和16年5月横須賀海兵団に入団、新兵教育を受け、海軍航海学校附を命ぜられ赴任し、その12月8日、日米開戦を聞かされる。

航海学校には昭和19年5月まで勤務し、横須賀警備隊で砲術(対

空機銃)の教程を終え、8月巡洋艦「能代」に乗り組みを命ぜられる。その頃「能代」は南方で任務についており、私は門司港から航空母艦「雲鷹」に便乗してシンガポールに行き、10月「能代」がシンガポールのセレーター軍港に入港したので乗艦する。「能代」は17日シンガポールを離れリンガ湾の泊地へ急航した。

このころ連合艦隊は「捷一号」作戦を発動し、10月20日「能代」はボルネオ島のブルネイ港に入港

し、戦艦「大和」から燃料補給をうける。私は「大和」の巨大さには驚嘆した。

10月21日艦長は上甲板に80名に及ぼんとする兵員の前で「捷一号」すなわち「レイテ」決戦の出撃命令を伝達された。

わが「能代」は、第一遊撃部隊(総指揮官栗田中将)の第二水雷戦隊の旗艦として駆逐艦七隻で編成された。

10月22日ブルネイを出港、比島沖(レイテ)海戦に出撃する。



巡洋艦「能代」に乗艦して比島沖海戦へ出撃

10月23日出撃2日目の朝、敵潜水艦から発射された魚雷が「能代」を通過して、その直後「愛宕」と「高雄」に命中し「愛宕」は沈んでいった。その後も魚雷の攻撃で「摩耶」にも命中して轟沈する、そのすさまじい光景は前方にいた私にもよく見えた。

第一遊撃部隊の主力は25日「サンベルナジノ」海峡に向かい、「能代」は海峡をでて艦隊の最右翼で進撃する陣形となった。

レイテ沖において米空母群に砲撃を加え自艦も数次にわたって敵



小島久治さん

ていた木材につかまっで漂流する。高波で何度か木材から手が離れ、もう駄目かと不安に襲われたが、2時間くらい後に駆逐艦「秋霜」に収容されカムラン湾に航行、そこで巡洋艦「大淀」に移りシンガポールへ入港した。

11月3日シンガ

ポールの海軍病院

艦上機の攻撃をうけ「能代」も主砲、高角砲、機銃で交戦する。その敵艦爆機の急降下による爆弾の投下で直撃弾一発が右舷二番供給所にうける。私も対空機銃（25ミリ）の射手として交戦。機銃の銃身が熱で真っ赤となり冷却しては攻撃を続けた。

26日は朝から数十機の雷撃機を主体とした艦上機の攻撃をうけ、右舷に魚雷一発が命中し航行不能となる。さらに魚雷は左舷の私の配置されたところから数メートル後方に命中したが幸いにも命は助かるも両手に熱傷（やけど）をうける。この一撃で「能代」の命運はつき沈没は刻一刻と近づいてきて、11時頃「総員退去」の命令が下った。乗組員は退去の行動にうつり、私は右舷から海上に流失し

入院、傷は比較的軽く14日で退院、即日駆逐艦「清霜」に乗り組みを命ぜられ、シンガポールのドックで船体修理中の「清霜」に乗艦した。しばらく待機し24日ミンドロ島の攻撃に出港する。26日午後8時「ただ今より突入する。」の命令が出て間もなく、敵機の直撃を受け艦の中央は火災となり航行不能となる。その数分あとに後部積載の対潜水艦攻撃の爆雷が自爆して、上甲板は修羅場となる。私は右舷の中央で対空機銃の射手に配置されていたが、火災で機銃は一度も使用できず交戦することなく、自身が敵機の銃弾による断片で「右大腿部」を負傷し艦首に逃れる。艦は夜間の火災で鮮明な標的となつて、数次にわたる敵機の機銃掃射がわれわれ兵員に向か

つて情け容赦なく無差別に弾の雨を降らし、甲板は悲惨な状態であった。「清霜」は艦尾から沈下し、午後10時「総員退去」の命令が出て、私はロープにつたつて艦首から海中へ退去する。海中では木材につかまり艦を離れようとするが、海は重油で火がひろまっているので、敵機は漂流している兵員に向かって銃撃をくりかえしてきた。漂流すること5時間余、火も消え静かな海となり、もやが発生してく

1月23日全治退院、1月31日燃料輸送船に便乗し、3月4日徳山港に入港する。この戦闘で多くの戦友を失った。戦闘の規模が大きい小さいにかかわらず武力行使の中心は兵員で交戦中犠牲となった者に心からご冥福をお祈りし悲惨な戦争のないことを願うものです。58年を省みて、多くの犠牲から得た平和な国は国民にとつていかに幸せか、感謝を込めて新たな決意で平和な国づくりを誓いたい。



寄せ書き

出征軍人に贈られた寄せ書き。日章旗にぎっしり書き込まれた名前には岡谷市長、助役、市議会議長らも



階級章

対空機銃射手として軍艦に乗艦、2度の沈没にあいながら帰還した小島さんが所有する海軍階級章など



有賀正吉さん

輸送船団の行方は私たちには知らされていません。今日は東、明日は西とどこへ行くやら、山国育ちの私には見当もつかなく、ただ毎日、青い海を見て過ごした。船底から響く、エンジン音の音、眼前に展開する果てしない大海原。水平線の彼方に思いをしのぶは故郷の父

母兄弟のこと。マストに高く日章旗を掲げた数知れない輸送船は、黄色に濁った中国の杭州湾に、錨を下ろした。ここでは空に爆音高く、遠くに大砲の音も聞こえてきた。いよいよ上陸が近づいた。兵士同士で話すうちに、上海が堅固で上陸できないため、遠浅で船の着かない上陸困難な杭州湾を選んだの奇襲作戦をするらしいとのことだった。敵前上陸の総指揮官は柳川中将という、猿飛佐助の戦法を使う霧使いの名人と聞く。それから毎日朝から晩まで、縄梯子を使って上陸の演習が続けられた。雲が垂れこめた晩秋のやや寒い日、いよいよ霧を使つての払暁敵前上陸となった。三十有余キロもある銃剣や食料を背囊の上に背負い、大きな輸送船から、縄梯子を使って小舟艇に移るのだが背中の荷物が重く手と足が一緒になつてしまいなかなか大変だ。それに黄色く濁った泥海は人を飲むかの様に波立っている。どこから来たのか舟艇が近付いてきた。縄梯子をようやく下りて、舟艇に乗りうつすが、船は木の葉のように揺れてタイミングが合わないとい海に呑まれてしまふそうである。私たち工兵第一分隊は真っ先に乗り出発した。岸まで80メートルくらいはあるかと思われる。ところで小船は底をついて動かない。



千人針

戦地へ赴く肉親などのために、武運長久を願い、無事に帰還できることを祈って千人の女性から千個の縫い玉を作ってもらった布。当時、これを身に付けていると敵弾が避けて通ると言われていた

昭和8年、水戸（茨城県）の工兵十四連隊に入隊。満州事変の留守隊として訓練を受けた。昭和12年10月には再び召集がかかり、船で長崎県の五島列島へ。貨物船を輸送船に改造したという船には、兵隊と馬と一緒に乗り込んだ。中国の杭州に上陸したのが日本をたつてから1か月後。上海を攻めた舞台とともに『大湖』をはさんで南北から南京攻略にかかった。工兵として出征したこともあり壊された橋を築きながら戦った。南京まで、延べ3にわたる橋を造った。大湖では敵から船を奪つて横断。同年12月に南京を攻め落とした。現地では食料の補給がなかったため、調達には苦労した。戦地で書きとめた日記から「青春時代」の思いを振り返り、「戦争

の悲惨さを認識することで、今の平和を考えることが必要ではないのか」と苦しかった時代を思い起こし、少しでも若い世代に知ってもらいたいと思います。

杭州湾に敵前上陸

昭和12年、日中戦争が始まった年の11月、貨物船を改造した運輸船に一兵士として乗り込んだ私は、鏡のような静かな玄海の名残惜しく見ていた。夕日は玄海の波に落ち、島、山は次第に紫紺に暮れて、やがて闇のとばりの中に人も家も見えなくなった。「生きて再び懐かしの故国に帰る日のあるやなきや」と思うと、言い知れぬ惜別の情がこの玄海にひしひしと迫ってくる。

『早く降りろ』早く降りないと潮が引いて船が立ち往生になるという。遠浅のため銃剣も食料も背囊の上に乗せてふんどし一つになつて泥海に飛び込むと腰のあたりまで水にぬれた。晩秋の海の水は冷たく、遠浅の海砂は厚く歩きにくくなかなか進まない。銃声も激しくジグジグと右に左に弾が音を立って飛んで来る。兵隊の襲来と銃声に驚いて鵠（中国特有黒くカラスに似ている）が20羽30羽騒々しく飛び回っている。長い船旅から血生臭い異国であるが土の親しさをしみじみと感じ、大陸に上陸した。

徐州合戦従軍日記

月の光やローソクの灯の下で書いたのもあり、65年も前のものですので、色あせてはつきり読み取れずまた抜粋に手間どりました。

(この日記は昭和13年5月徐州合戦に従軍したときのもので、当時は、軍の機密で内地に持ち帰ることはできなかつたが、満鉄職員の新井佐太郎氏に託したものの中心より抜粋したものです。)

5月15日

中国の山東省えん州は孔子誕生の地として知られ、宿舎にあてられた学校の庭はアカシアの花が満開で、付近一帯黄金色に実った麦が兵隊の背より高く初夏の風に静かに揺れていて、戦争はどこでやっているかのようである。

炊事に頼んだ爺さん(クリー)が、いやに故郷の父に似ていて哀れさを感じた。果てしない麦畑の彼方に夕日が没するころ、ふと故郷の父母、兄弟、村人、知人の顔が浮かんだ。

5月17日

初夏の空は晴れ、南風に揺らぐ、緑の田園を汽車は轟然と走り、界下村・藤県を過ぎて臨城に着き一夜を南京虫と虱の夜襲に会いながら明してしばらくして棗荘につく。

刻々と変転する第一戦の戦況は息詰まる思いで時は過ぎ、真夏を思わせる暑い日ざしに照りつけられて、中興公司の広場は兵隊と馬と自動車でわき返っている。

5月18日

台児荘の激戦は数えきれない程の白布に包まれた戦死者の英霊と何千人かの手や足を失った戦傷者が無蓋車に乗って、その傷の手当てもできず蛆がわいて続々と護送されてくる。彼等は口をそろえて日本の砲弾はサンソ瓶、敵の砲弾はドラム缶



太湖を渡る漆原工兵隊

だ。君達は徐州攻撃戦に参加するだろうが、明日の命もわからないぞ。『俺たちは内地に帰るから、もし便りがあるならしてやるぞ』と言われ、今度の戦いは激戦と聞いていたので、かねてより用意しておいた遺髪に手紙を添えて、この戦傷兵に託した。

5月19日

徐州攻撃戦は開始され、ものすごい土煙で車は走り、馬は駆け、あたり一面の麦とコーリヤンの畑は煙幕を敷いたように煙っている。『水を一杯飲みたいなあ』と思わず声を出す。左手に百本

近い墓標が並んでいる。赤柴部隊の兵隊がやられたのだ。俺たちも明日はこの一本の墓標に変わるのかと思ひ、黙祷を捧げ埃の麦畑、血生臭い屍を越えてどこまで続くか、広漠千里土の海を行く。

5月21日

橋梁破壊され、わが工兵隊は不眠不休で浮橋をかけて渡河して徐州近く進撃する。震ふる泥海を踏み越えての南京攻撃に比べて、炎熱にさらされて麦と埃の海を乗り越えての徐州、やがて塵にまみれた日の丸が徐州城壁

高くゆれている。再会を約束して、えん州で五人で撮った写真の中の二人が英霊になったことを知り、今なお忘れることはできない。

敵の陣地の真ん前に毒蛇の如く横たわるクリーク(運河)、敵は常にそのクリークを守備線として最後の射撃を続ける。その敵弾の中にあつて友軍を渡す橋をつくる。われら工兵の任務だ。姿だ。倒れた戦友を川畔に担ぎ上げながら敵弾の水煙立つ水中の作業、渡る兵士も、渡す兵士も涙だ。



中国山東省済南にて 26才

- ◇遠き日に千人針に短歌書きて贈りてくれし女今いずこ
- ◇ロウソクの灯で書きし従軍記短歌一つなきわれの青春
- ◇われ工兵背で橋ささえ兵渡す夢さめたるに痛さ残れり
- ◇徐州戦終りし真夜に戦友呼ぶに野犬の遠ぼえ広野にこだます
- ◇遺髪入れ母に送りし軍事使手箱の奥に色あせてあり